

ルイゼ・リンザー 『我々自身の中のヒトラー』 のまとめ

山 中 博 心

現代の人間の心理分析としての『我々自身の中のヒトラー』(1947年)は30頁ほどのエッセイであり、マックス・ピカートの第3帝国時の人間心理の分析(1946年)を批判的に受容し、病的でネガティブに過去にしか目を向けないピカートと違い、未来に向けてヒトラー現象を捉えている。つまりヨーロッパ文明の没落と新しいものの誕生という二つの視点から新しい可能性を探ろうとした。そうした絶望的な状況からの出口を「連帯」という思想に託そうとする。人びとの考え方、生き方は「非連続」であり、全てがばらばらの状態の中で印象の洪水に呑み込まれていた、と分析する。そこには物事の質は問題にならず、ゲーテ、バッハ、カントのドイツとヒトラーのドイツが併存し、大事なことは「何かが起こっている」という流れになっていた。

こうした「不連続」な行為のあり方の原因をピカートは「神から離反」と考えるが、これは形而上学的な意味付けであり、もう半分が忘れられている、とリンザーは考える。しかし不連続が「行動主義」とヒトラー同調者を生んだだけではない、しっかりした反対勢力もあったのである。事実、1932年には国民の2/3はヒトラー反対者であった。それでもピカートはそうした勢力がバラバラであったと言う。しかしリンザーは信念をもったグループであり、価値の中心に「共同体」を置いていたと分析する。その実、1924年から1932年にはSPD支持は620万から720万に、KPDは370万から480万に増えており、ヒトラーを支持する者は泡沫政党であり、「高い価値」に代わり個人的利益を優先する小市民的ドイツ人であった。つまりゲーテ言うところの「死して成る(「至福の憧れ」)ことに不安を持つ人たちである。そのために慌てて性急に安心を求めることは逆により深い不安を誘発するとリンザーは考える。その意味で神の仲介、神にすべてを委ねることを良しとしないグループは「社会変革」という理想の実現を目指した。

「我々の中のヒトラー」というピカートの考えは重要であり、そうした病的気質は誰もが持っているものである。ヒトラーは悪の象徴であり、マス(集団)の中の「匿名」の個人に住みついている。それ故ヒトラーを分析することはとりもなおさずマスに落ち込んだ市民を分析することである。つまり意志の弱さの「裏返し」の権力欲、感傷主義の「裏返し」の残酷さ、知性や精神

への深い憎しみの「裏返し」の知的行為への憧れ、マスを軽蔑することの「裏返し」の集団希求といった性向である。そうした振じれた心性から「自分は間違わない」という信仰、冷徹な計算と狡猾さが生まれ、瞬間的気分に左右され、ヒステリーに陥る。やがて休みなく変革し、過剰行動と受け身的な状態に揺れ、最後には人間嫌いから迫害妄想に至る、とリンザーは分析する。所謂、「ルサンチマン」であり、結局は受け身的な態度である。

ルサンチマンは無力感を生み、「精神の自家中毒」を起こし、他人との比較において相手を賛嘆するか、さもなくば諦め、妬みに陥る。そうなれば正しい判断がおぼつかなくなる。事実と厳然たる価値を歪曲し、「自分の手の届かない価値」があることを、そんなものはないと思うか、求めるだけの価値のないものと嘘で歪める。狐と酸っぱいブドウのお話である。その種の人間は奇妙な「非現実感覚」に捉えられ、薄明の「仮象世界」に生き、がむしゃらに手の届かぬものを手に入れようとする。ヒトラーにとって酸っぱいブドウは「真の教養」であった。現実に満足感を得られぬ者は酷い鬱状態に陥ることがある。そうしたとき、真理や現実をわざと見ないようにする。ヒトラーは「無責任」と絶対的な「権力要求」の間を揺れていた。激しい攻撃性と受け身的ルサンチマン。こうしたドイツ人の持っている他者との比較傾向は、いい意味で「世界への開き」であると同時に悪い意味で「関係妄想」であり、自分と疎遠な存在に脅かされる。そうして矛先を「世界ユダヤ主義」と「ボルシェヴィズム」に向ける。そこには何ら論理的な筋道はなく、具体的で現実的な正しさへの要求もない。それが「奴らは我々を飢え死にさせる」という固定観念を生み、自分達が選ばれた民族であるという、奇妙な「選民意識」を生むのである。そうした状況下で素朴な「祖国愛」は「ナショナリズム」に変貌する。ヴェルサイユ条約によって「我々に不当なことがなされた」という怨念から復讐心が芽生える。多くのドイツ人は「自分達が攻撃者で、ヒトラーに騙されている」ことに気づかない。それが自分達は苦しむために生まれたという信念に変わり、人びとの間にルサンチマンが「伝染」していくのである。

こうして既存の「価値の転覆」が画策される。そこでは人生は「所与」のものではなく、使命、課題となる。

軽快さに欠け、喜び、楽しみは価値なきものとなる。まさに倒錯した快感の中にいることになり、「飢え」が他人を攻撃する武器になる。「我々は飢えている、それはよし、あいつらは飢えていない、これもよし、重要なのは我々が文句をつけることであいつらの食欲を台無しにすることである。」つまり溜飲を下げ、復讐心を満たすことである。しかし何のために飢えているかを知っている者は飢えに耐えられる、たとえば苦行僧や社会改革を目指すロシア人のように。飢えが彼らの思考の中心を占拠するのではなく、生の価値の下に置かれているが、生の中心に飢えを置くドイツ人の場合、自分たちの抱える罪の意識という暗い感情が麻痺させられている。それは自分たちが犯した間違いを他人に転嫁するためである。当然転嫁できる相手が必要になるため、自分たちは「犯罪者」から「殉教者」に変わる。そうした心の闇に隠された傷を明らかにしない限り癒えることはない、とリンザーは言う。

こうしたルサンチマンと攻撃性が同居するところがピカートの言う「非連続」とその結果としての「不安」である。価値の中心の喪失から来る非連続、その結果としての「疑念」が生まれ、最早絶対的な真理に対する信仰は失せ、「相対主義」が生まれる。そうなれば決定権は民族・種族が握ることになる。世界はまとまりがなくなり、文学においてもジェームス・ジョイスの『ユリシーズ』やシュールリアリズムのようにリアリティー感を失って行く。場当たりの政治が跋扈し、残酷と感傷の併置、感動的な歌と残酷な殺戮が一人の人間の中に同居する。まさに非連続の賜物である。人間は自動機械のようになり、「誰々の名において」のように、倫理の主体ではなくなる。道具となった人間は利用価値によって測られ、役に立たぬ者はお荷物になる。完全にマス化された人間である。

そうした非連続は繋がり感情である「愛」を排除する。一人の「あなた」(Du) に向かう能力を失い、完全に弧化していく。対象を持つ憂いや恐れと異なり、対象を持たぬ不安は底なしの実存の不安に至る。ヒットラーは大きな不安を抱えていたため周りの女性達はいつも彼を陽気にしなければならなかった。エロス、愛のみならず同性愛すら彼には無縁であった。真っ青になって震えながらヒットラーは叫ぶ、「どの木の後ろにも暗殺者がいる」。ヒットラーの性急さ、「彼にとって無」であるリアリティーの脅威に怯え、そうした状況下での彼の「叫び」も自分の存在の証しにすぎない。彼は死に怯えていたのではなく、生に不安を抱いていたのである。ドイツ人全般が死に慣らされ、死の偉大さ、一回性、高貴さを忘れ、リルケの『マルテの手記』のように固有の死ではなく、誰のものでもない死を死んで行くのである。言い換えれば匿名の生にして、匿名の死である。

個人はマスの中で自分が止揚されたと感じ、生きるよりも死ぬ方が容易に思えるようになる。これは明らかに長い間の「精神の鈍化」の結果である。そうした状況下で人は「冷笑的」になるが、それは恐怖から唯一身を守る手段である。死のお祭り騒ぎ、サディズム等「神経を興奮させる」ことを求める心性もそうである。ここで力を持つのは「マスの原理」であり、そうしたことへの抵抗も「麻痺したマス」の前では役に立たない。

人は往々にしてハイデガーの言う存在の不安から逃れる術として、出来るだけ活発に行動し、休みなく働くか、マスか教会へあるいはアパシーや病気へ逃げ、さらには運命論への逃げを打つが、どれもが無益である。何故ならそうしたバラバラの精神それ自体が「罰」であるのだからである。そのように不安が真理の認識、リアルで繋がりあるものの認識を妨げる。そうした不連続、孤立からの脱出口は「連帯」することである。真の救いは「勇氣」を持つこと、死ぬほどの苦しみを通して、ニヒリズムの地獄を通り抜けた先にある「信頼」である。生きることを信頼し、生きることの「最高の価値」を愛することの中に新しい価値が生まれる。そうした道はピカートと違う道を行くが、同じところへたどり着く。つまり「非連続は愛によって止揚される」、言い換えればナチスドイツが禁じていた議論や人間と人間の限りなきコミュニケーションによってである、とリンザーは結論づけている。